

## 「信濃のみちの紀」

(翻刻) 東京 桂の会

(會員三名)

すかのねのなかき春日もやゝくれゆくまに――世ハ花そめのころもたちかふるころしも はゝとしのしなる善光寺にまうて給ハんとてたひよそひし給ふけるにさらても老ませれハ ひなの長路のうしろめたさにもろともまうてまほしうてとミにおもひたちぬ されハはらからのことくしたしくおもふともにしハしのほとのかれつけ侍りしにかねておもひもかけぬこととてたゝこハ――とはかりにてかたミにことの葉ハなく『いのちたにころろにかなふものならハ』なとすしつゝたちいてんとするにしはしやと大路にいてゝ見おくらゝハうれしきものからさらにむねふたかりつゝなミたさしくミぬ されとたひたつ日卯月朔日になりぬるに 山端にゝほふあさ日のうらゝとさしわたるにはゝとしのけふそおもふねかひをハかなひつれといさミたち給ふかうれしうあはたの山路よりあふさかのせきのそかひをわけゆきて三井寺の大ひさにまうつ このゆふへ石山寺のふもとにやともとめけるか夜すからいねかてに猶ゆくすゑのことなとかたり合て

あすの夜はまたいつちにかむすふらんけふよりそめしくさのまくらも

二日けふもいとようはれわたりけれハ小ふねさしつゝせたにわたる 田つらを見れハ青やかなる若なへの風になミよるかすゝしうこゝろもうきたちゆくほとにかゝミのすくにやとりとらんとすさかいふに

かゝミ山見すてをゆかんくさまくらたひのやつれもやさしからまし

三日つとめてたちいつるに家居のかきねにまはらに咲かゝりぬる卯花にやゝおとつれんはつ音もいとゆかし たかミや河をわたりて多賀のミやしろにまいりてやとりとりぬ この家としハいとねもころにものしつゝあかミらもいにしとしをさなき子をめてかの木曾のかけはしふミ見つるにきゝわたりしことくあやうくハおほし待らさりし 御こゝろやすくおもほし給ひてとくかへりませなといふもうれし 四日今朝ハすりはりたむけとかいふに分のほりて見れハミつうみのおもてひとめに見えわたり こは神風のいふき山あは竹生島そなと人のをしへ給ふもこよなうこゝろのゆくかきなり されハおもふともとちもろともに見はいかにおかしからん またおもしろきふしもよミいてぬらんとおもふ給へられて

見せはやとおもふにも先こひしくてミやこのかたそなかめられける

けしきよき野山をいくらともなうこえゆくにこのほとりの沢にかきつはたの今さかりなるに又いろよき藤の咲かかりたれハ

藤なミのかゝる沢へのかきつはた何れかふかきゆかりなるらん

五日さめか井てふ所にいたりぬ こゝそむかしやまとたけのミことミあしのほけけそゝき給ひしあととなりとか 今もいときよらにわき出ぬるをたれも――むすひつゝミや居にしハしぬかつきぬ かしハはらと今津とのあひたハあふミみのゝ寝物かたりとかいひはやすめり をミなとものたちいてつゝ口とくさへつるハあなかなひたれとさるかたにおかし 六日せきかはらあか坂なと猶見ところもおほかりときゝつれとゆく先遠きみちにしあれハ先ミのゝたにくミにまいる 七日白石てふところよりやかて大ひさのミまへにぬかつく

しるへする人しあらすはいかてかハわかまうてこんミのゝ大寺

おそろしき河ふたつミつわたりてきふといふ所にやとる 子ひとつはかりよりふりいてゝいとこゝろほそいもねられねは

さらてたに雲おきたひのころも手をいかゝしほれとふれる雨かも

八日れいよりあさいしてをやミかたにたちいてぬれと又ふりいてぬ

ミやこへにゆく人あらハたひ衣うちしほりつゝこふとつけてよ

ひつしはかりよりはれわたりて日かけのにはへるかうれしうぬまでふうまやにやとる こゝよりいぬ山の大城けちかくミゆるかいさましようもめつらし 九日あさたつこまのすゝの音にいきミたちつゝミたけ山むろ木たむけわけのほるになへておかしきけしきなり 大久手ほそく手とのあひたにひは坂てふたかき山をわけのほるまに――遠近の雲のまよひより見ゆるハこしの白山とたゝむかふたかねハかの分なとおもふ木曾のミたけなりとか いつれも真白にてあやにめさむるこゝちそする

世はなへて青葉しける夏としも雪のミ山ハしらすかはなり

十日こゝよりわけゆく山路ハいとさかしうて名さへ十三たむけとかこハたかき山を十余り三つこゆるによりてなん名つくとぞ 猶たとりつゝゆくに中つかへてふところをわたりてやとりぬ このあるしハるなかくてもあらすおほとかに家居なともゆえつきてたちならふ庭の木たちいとおかしうつくりなして軒端にかゝる藤かつらの真白なるか中つかハの名にあえてなミのかゝりたらんさまなり てうせし物も夜のものもいときよらにたひの料とも見えすなんつとめていてたちぬいへとしのたひらかにかへりまさんとさしむすれ給ハてやす

らひ給ひねなとねもころにいふに

中つ河たきりておつるしら波のたちかへりつゝ又君を見む

十一日八重かさなりし山路をわけいとおほつかうこたかき木々の梢よりおちくるせみのこゑ——山ひこにこたへてとよミわたるもあハれなり

日のいつるかたをひかしとなかめつゝしらぬ山路をたとりてそゆく

十二日分ゆくまに——すこしたひらかなるところにいひなほゆく今朝こえし山ハものかハはるかにたかき山そハのしたハこくらきまでしけりにしけりし木たちのいくひろともなく岩きりとほす水のおとものかなしう たかねを見れハこけふりし岩ほの今やかしらうへにおちかゝらんさまなるハ岩くやすかしこきみちとよめりしハかゝるところにこそはと今しもおほえていはんかたなくかしこし されとは君のすくよかにあしもかろけにあゆミ給ふかうれしくてゆくほとにをさゝもてつくる小屋にかしらハ草かせふりミたせしことくきたなけるおむなの茶などにてひさくかあり そこにしハしやすらふにあなあはれミやこ人のかゝるみちハふミもならひ給ハぬにくさのむしろのいかにいふせくおほすらめなといふに

霧ふかきくさのむしろもつかれてハ玉のうてなとおもほ

きものから袖にかゝるはたうれし

枝たかミそれともしらぬ山さくら見するハ風のなさけなりけり

又分のほる山はミねたかく谷ふかうしてところ——にかけはししたるかあやふし

今たにもなほあやふきハしなのなる木曾のミ坂にかゝるかけはし

かさこしの山こえくれハしら雲のかゝると見しもふもとなりけり

飯田でふところにとりてとくゆかんとするに雨ふりぬれハ十六日午過るころまでいひてはれゆくまに——いてたちぬ真しのかはらまつめかはらなとひろやかなるはらをゆくにきりハラ望月てふ里たりもこのちかきほとにやあらんなど見わたしぬるに さゝやかなる駒のこのもかのもにあそふさまいとめつらしうおやのちなとふくむるいかなしうあはれなりあふさかの山たちならしミやこへにとくいてこなむ木曾のわかこま

十六日大しまといふところよりあふき見れハこまかたけねん上かミね木曾の御たけなへて名にたかき山々ミな真白なるかあさ日かけにかゝやくなといとおかし

白たへの雪に見まかふ花もあれハ花に見まかふ雪もありけり

ゆるかな

かくハおもへとみゝときかうるさけれハいはてなん 何やくれやとねもころに物しつるハうれしきものからかのうたひものゝくろつかのこととおもひいたされておそろしけれハやかいてぬ まこめつまこといふところよりむさしとしなのなるかのミてらにまうつるみちのさかひめありてこのみちハいとほそうあまた石のまろひあひつゝゆきくるし されととくまうてし人のしをるしをりをしるへにひろせてふところにやとる 十三日こゝより大たひらをゆくにいましもさむき所にてやう——さくら山なしなとまたしきほととのさかりなり

しなのなる木曾の山路の山さくら春はしらすて過にけるかも

十四日なほわけゆくほとに又をとこをミなのゆくみちかたにふたすちあり をミなのいるへきみちハいとくう小笹しける山のかけみちなり さかをゆくにミちいとふかく谷の木間にうくひすこまとりなどのそこはかとなくおとつるゝさへところからものかなし されところ——にたちませるミほとけのしるへし給ふにふミもまとハてふもとなるさといいてぬるハ けにみちある大御代にこそはあれといひかしこし十五日たとる——ゆくにさとふく風のたゝならぬハ何にかあらんとあふき見れは雪とふるさくらなりけり しはしハえたちもはなれてまもらひをるほと名こりなうちりかゝるハをし

なほ見ところおほかめれと友人のいかにかおもふらんとまつ小野でふところにてやとりもとめける こゝのあるしものか中つ河にたちもおくれす何くれとむかしへのことなとたと——しからすかたりぬるそいかなる人にかあらんとゆかし十七日うとふ山うとふたむけなとゆくに又ひろやかなるはらにそいてぬる こハきゝやうかハラとか人のをしへければ

きちかうの原としきけハうちつけに花さく秋のなつかしきかな

こよハあさ間山のふもとなるゆあミてんとてこゝにやとる 十八日またかりやかハラかりやかたけ立たむけなとふてにかくへうもあらず さるかはらとて名にたてるさかしき山もやう——過てさらしなのさとおはすて山もこのちかきほとに見ゆれば分まほしうおもひ侍れとたゝかつらきのミねの雲とよそになんやミぬ はるけきみちもきときぬれハあすはかりかのミてらにまうてなんといひあへるかうれしうてめもあはさりけれと 十九日朝またきよりあしもかろくたちいてぬこゝにたには河とてあなるか世にはやき水にさかひてゆくなれハさをさしあへすひきわたしたるつなをたくりつゝわたしぬるハめもきるさまなり からうしてかのミほとけのミまへにまうつ

ぬかつけハ身にしむはかりかしこくてなミたのほかにこの葉もなし

このとしころたれも／＼ねきしことなれハひと日ふた日この  
ミ寺にさもらひて夜もすから御名となふることのたふとさこ  
の世に似るものなし ふと故郷いて／＼いく日そなとおよひも  
てかそふれハ十はたといふもあまりぬめり さて御仏のミま  
へにいとま申つゝたちいつるにも又まうてんことのかたけれ  
ハいとかなしくすゝるになミたおちてむねつふるゝやうなれ  
ハかへりみかちにてぬ 廿五日さてゆくほとにかのおそろ  
しかりしたには河もいつしかすきておミといふところにやと  
る よへよりうちくもりて今やふりいてん空の雲ハならひゆ  
く人の中をさへへたてぬ とかくするうちふりいてたり せ  
はきみちのなめらかなれハいとくるしうようせすハやかて谷  
のそこにやまろひおちぬへければ身の毛もよたつばかりおそ  
ろし されハつゝゑにすかる／＼ゆきなつむにいかゝしてやす  
さハゆきすきぬ さるをしらてあとにやおくれけんとかやすら  
ふにみちにさへまとひたり こハいかにせん／＼といへと遠  
近人のゆきかひもけふハまれなれハせんすへなくすゝるにか  
なしうて

うきたひのかきりなるらん雨雲のはれぬミたも袖に  
かゝるハ

つふやくにすさかたつねくるにゆき合たり からうしてむら  
井といふ所にやとる けふハおそろしき阿いくらともなうわ  
たるにまうてしほとさりともおもハさりしを太山の雪のとけ

やつかはの秋のたのミをかねてよりうゝるをとめか手ふ  
りにそしる

このゆふへハうつゝといふところにやとる ミちいとよけれ  
はとくなこやにいたりてやとめぬ あるしのいてぬるを  
見れハあひしれる人なり こハ十とせまりあひ見ねハいとこ  
ひしうハおもふ給へなからいつこともおもひもわかつたゝな  
こやとのミきゝしことなれはけふかくめぐりあひてんとハ露  
おもひかけすうれしき物からむねうちさわきつゝはゝ君もろ  
ともやつれはてにしたひのよそひいとつゝまし あるしもう  
ちおとろきこのとしころ御うへをのミわすれ侍る間なく今ひ  
とたひミやこへまうてまほしうおもふ給へなから 老のあし  
のあやふく侍れはこゝろにもあらてすくい侍りしにゆくりな  
くきませしこそうれしけれとてやかてとしをはしめよめなと  
ゐていてつゝこハうまこなりとて七つとよつばかりのうなゐ  
をとめの見ゆるかいとうつくしうあいきやうつきてらうたけ  
なれはゆくすゑいかなるさかえをかまちいてぬらんとたのも  
し 何くれとかたみにこしかたかたりあひぬるにあかおほち  
君むかしこゝにきましてかきのこし給ふ水くきとてとうてた  
るを見るにありし世のことつふ／＼とおもひいたされむねふ  
たかる物からこのあるしのありかたき真こゝろいとうれしさ  
いはんかたなくたゝなミたのミおちぬ

やつれぬるたひのころもハ袖せはミこのうれしさをな

ぬる けにやこよなう水かさまさりてなみたちぬ中にも大た  
きり中たきりといふか分て名にたかはすおそろし さつきち  
かくなりゆくまゝをのわらハへもたる軒ことに立わたしたる  
のほりの風にうちなひけるか分ゆく山のところ／＼に見ゆる  
ハいさましうてむかしものかたりの絵にかいたらんさまなり  
猶ゆき／＼てちきりもふかき中つ河に又やとりとりぬ やか  
てとしのいてむかへてねもころに物しつるははやふるさにと  
かへりしこゝちそする またひつしはかりなれハうちも寝ら  
れすうかりしみちのさまなとかたりあひつゝあすも又かの十  
三たむけ分ゆかんもこゝろうしなといふ としたかき君のこ  
よなき物こりにかへさハみちかへてんといひますにしかよけ  
んとであるしのなさけしれるによきみちやあなるをしへてよ  
といふにさなんあすこゑ給ふ山のかたにいせとおハりへゆく  
みちの侍るかたひらかなれハよろしなといこまやかにきこ  
ゆるもうれし 三十日つとめていてたつにもわかれをしうひ  
と夜のやとりさへさるへきえにしならんとおもふにましてゆ  
きかひの夜をかさねたれハたちうくミやこへにまうのほりた  
まハゝかならずおとろかし給ひねなといひてわかれぬるもあ  
やしきまてになん かまとゝいふ所にやとめあさたちい  
てゝ見たせハ田面／＼にをとめらかさなへとり／＼田うた  
うたひてさともとゝろにゝきはゝしうしうゝるにかさとも  
のしろきかあをきなへの中にミゆるもすゝし

にゝつゝまん

あすはとくかへらんとてこゝろしらひするにあろしのかくは  
るけきみち分給ふことのまたかたけれハこたひよきをりに天  
てらす大御神へもまうてたまへ あかかたよりすさてまつ  
れは御うしろやすくおほしたまへやなとねもころなるにこゝ  
ろひかれぬ こよひハ家にかへりしこゝちしてひもとかぬた  
ひのころもゝうらやすくうちとけてふしぬれハあさいをそし  
たる けふハこのちかきわたりのミてらに御するへし侍らん  
とてかのうまこもろともそゝのかすにうちつれていつ 御堂  
のさまハいふもさらなり このにハにたちならひし木々ハミ  
なさくらなり されとはなハとくちりて今ハ名こりもなし  
うすくこきわか葉にそよく風いとすゝしうて見ところある物  
から春ならましハとおもふ そこよりいかなる御神の御や  
しろにやつき／＼しうたちならひしミや居ふしをかミつゝう  
ちすくるにひろやかなる他のおもてに木のうきたるにこゝら  
のかめあそへり かのをさなきかさゝやかにらうたき手うち  
ならすになれたるにや水きはによるも興あり なかき日あそ  
はんとてこのわたりうかれありくにあやにくにも雨ふりいて  
ぬれハやかて家路にかへりぬ かきたれも／＼うらなくもの  
するにあまえてたひのうきことさへわすれぬ されととまり  
はつるところにあらねはいまハとてかへらんとするにもこと  
葉はなくてたゝかたミにうちなかれぬ はゝとし

かたいとのあふをかきりにたえもせてわかれんことそかなしかりける

かたいとのあはてはてなハ今さらにおもひのふしのかくハそはしを

小さめふりてみちあしけれとあるし御見おくりする 名にたてる大城見せまいらせんとてしるへするはいとうれし

けにもきゝわたるむさしの大城にもたちまされるとかこかねもてつくるさちのきらゝしきハたとしへなし かくうちくもるをりたにかゝるをましてうらゝとさしわたるあしたゆふへの日かけにかゝやき合たらんはいかはかりにかあらんとめさむるこゝちす こゝもかしこものこりなうをしへ見めぐりてやかてわかれんとする はゝ君のそてをひかへてあはれ老せぬ身にしあらハミやこまで御おくり申さまほしきに今かく見たてまつるかつひの御わかれにや侍らんとてなみたさしくミつゝまもらひぬるかいとすさらにかなし はゝ君

えにしあらハ又あひ見んとおもふにもいかまほしきハ命なりけり

君を見てうれしきことにおもひしハかなしかるへきはしめなりけり

あかすおもふこゝろまとひにたゝゆめ路たとるやうにてゆくゝさやにとまる 朝またきよをミなともとおきませよはやふなてすといふにおとろかされてさやのわたりへゆく

またをやまねハ先神のおはしますかたをふしをかみつゝ

神路山たちまふミねの雨雲をふきはらひませいせの神風けふなんうち外の御神へまうてんとてさるまうけするによへの雨ハさりけなくはれたり いとうれしうて先外宮の御まへにまいりて

天てらす神ハありけり神路山きのふの雲ハあとたにもなし

杉のむらたち分つゝもあまの岩門とかいふところまうつミやつこらとりゝまうつる人のとしをいとたかやかのにりつゝあかしたてまつるもゆゑゝいさゝかたかき所にいこひをるにうミつらけちかくひとめに見えわたるかいとめつらしくて

神風やいせのうミへにおりたちてきよきなきさの玉ひろハなん

この大御神とうちの御神へまうつるあいたをあひの山とかいひてわかきをミナハミつのをかきまきくりまたいわけなき子らハをかしけによそひてえもしれぬこと はうしとりをとりさゝめくさまあハれに興あるわきなり 分ゆくまゝ清きなかれあり こはいすゝ河となん はゝとし

わたらひやいすゝ川へにやとりしてこゝろのちりをしハしすゝかん

いすゝ河たえぬなかれの水清ミむすハぬそてもすゝしか

むくつけきわたし守のはやふねにのれといふはすミた川のむかしめきてさすかにおかし よへの名残むらゝ雲のたちまふ物からほのにはう日かけうれし なミ間にうかふ水とりのさはなるハふるさとの名をおひやしぬらん さらハおもふ人のありやなしやとひてましと はゝとしのあされ給ふにまことにものかたりおほえて人々わらふ またむかひにミゆるこそこの国の海ハらなれとてをしるにめをとゝめて見れはしるき衣ひきわたしたらんさまなるかところゝ木の葉のうかふと見ゆるはいさりするあまのふねならんかし けふはさつきをせちとてわらやの軒もなへてふきわたすよもきさうふのかをりたる中々をかし さと人のつきゝしうさうそきてほこりにゆくにひなたにかゝるをミや大路いかににきハしからんとなつかし このゆふへよりふりいたり 神戸といふところになやとる つとめていたり けふもふりくらしてみちわろし されとかの木曾の山路にくらふれハ何はかりのこともなし 松坂にやとる けふもをやます されとかのなこやなるあろしのねもころにゆくさきのことまてとせよくせよといひしらせておこせしにまたすさもこゝろときをのこなれハ露こゝろのゆかぬこともなうものするをはゝ君のよろこほひ給ふ こもかのあろしの真こゝろなれハなりとうれしきにもなみたさへおちぬ くしたミや河のわたりふな間よく七日といふにかの大御神のミまへちかき山田とかいふにやとる

りけり

やがて大御神に先ぬかつきつゝねきことすとて

まそかゝミかけてそいのるはゝそはのはゝもわか子もいやさきかれと

うき草のうきことしけきあか身をハ神もあはれと見そなハしませ

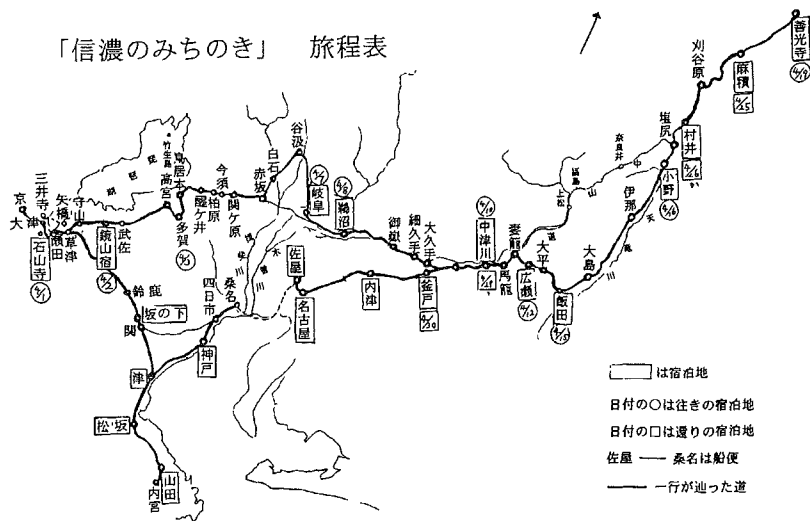
そこらをかミめくるに御かくらとのゝをすのつまより見入ぬれはらうたけなるいらつめのおましに在かしろき下かさねにくだれないのきぬよそひ給ふミありさまいときよらにいミしうなまめかしきなり むかし中將の君のミそか事ありしミやの御あたりもかくあらんといふにあなかまさることはいはぬそよきさかなのことゝ神もそむき給ふらんとはゝ君のいさめ給ふそかしこきや けふよりふるさとへかへらんとおもふに空のけしきもよし いとゝあしもこゝろもかろらかにゆきゝて津といふ所にやとらんとす 入日の名こりうちけふりたるうミつらになミたつ松の木間よりたゆたふ舟のほのミゆるなといとおかしうてそゝろにこゝろとゝめぬ けふもはれたりこゝにせうとのみたふちとて名たかきミほとけのおはしますにかねてはゝ君のまうてまほしうし給ふれハこのミてらへも先まいりぬ

法のうミちかひの舟にさをさしてすゝしきくにゝミちひきまさなん

こまひくをのこのしるへして坂本にやとる けふもとくたち  
いてつゝすゝかの山路分ゆくにミヤのミまへにぬかつきて  
ふりはへてこしかひあれやすゝか山我ねきことも神のま  
にゝ

このゆふへハミヤこちかきわたりにやとかるかうれし ほの  
くあくるころよりいてぬ おひてよしとてやはせをわたる  
ふねより見れば八十のみなともけちかくてめなれし山のたゝ  
すまひ見ところおほき物からこゝろのいそきにめもとめすな  
ん 卯のミつばかりにうち出のはまのわたりへつく おのか  
さまくたちわかれてやかて家路にかへりつかんとおもふに  
も物あらたまりせられてこよなきたひのやつれの今さらつゝ  
ましうなりぬ さる折しもせうとの君うからやはは君の  
御むかへにとゐていてませしにゆきあへるうれしさいはん  
かたなし かたみに先たひらなるをよろこひぬるにもひとつ  
なミたそこほれぬ かくみちのほとはかなうおもひしことを  
くたゝしうかきつめんハ人わらへなることゝこよなうつゝ  
ましうおもほえぬれとは君のうち見ん人のこゝろもなくさ  
むものならんとしひてのたまひしゆゑになん  
もしほくさかきつめてしもかひなしやまた浦なれぬ海人  
のしわざに

「信濃のみちのき」 旅程表



うと推察される。

## 『枕臂集』と「信濃のみちの紀」について

大井 多津子

### 一、はじめに

「桂の会」で刈谷市中央図書館・村上文庫所蔵の『枕臂集』  
下巻にある「信濃のみちの紀」を解説した。(コピーは桂文庫  
所蔵)

『枕臂集』は賀茂季鷹の門人、志村節花<sup>せうか</sup>尼の長歌・短歌・往  
来文を同門の小森五百子が節花尼の没後三年目にあたる大保  
一二年(一八四二)に上梓したものである。

志村節花尼は本名を射代子、生年は不詳である。京都に生  
まれ賀茂季鷹について和歌を学び、天保九年(一八三八)に  
没している。編者の小森五百子については節花尼と同門の人  
であるという事以外はわからない。師の賀茂季鷹は宝暦元年  
(一七五二)に生まれ、本姓山本氏、生山または雲錦と号した。  
京都上賀茂の祠官となり正四位下安房守に任ぜられた。吉野  
の桜、立田川の紅葉を移し植えて居を雲錦亭と号し、花・紅  
葉の折々につけ友を招いて宴を張り、また歌仙堂を設け歌会  
を催した人であるから節花尼も五百子も招かれたことであらう

### 二、『枕臂集』の内容

上巻 師季鷹の序 四季 恋 雑後集

下巻 長歌 後集 和歌及び五百子との往来文 五百

子・鷹信の跋

下巻

★長歌 月照流水 反歌 くるひうた もつれいと

★往来文 若葉をつみて人におくるふミ

・女友たちの久しう音つれさるにつかハすふミ

・御ふたかたの君にたいまつるしたしきかたへ

つかハしたるふミ

・やことなき御あたりへ奉りしふミ

・やことなき御かたの東にかへらせ給ふをおく

り奉るふミ

・やことなき御あたりより給ハリし御せうそこ

にこたへ奉るふミ

・やことなき御かたの三十まり七とせの御いミ

に奉るふミ

梅をめぐること葉

あらし山の花見にまかり大井河にふねうかべて  
あそふ人を見る

あたこ山にのほること葉

ほとゝきすのこと葉

はたるをたつめること葉

かも河原にすゝミすること葉

かも川のほとりにあそひて

雪のふりけるあした

もろ花をめぐること葉

ゆう子の身まかり給ひしをかなしむ

法花寺の里のはゝをとふらふ

★信濃のみちの紀

★後集部 短歌

よしさねの君の三とせの御わさし給ふによりて  
奉るうた

三千子君をいはひまゐらすとて

御はらからの君をいはひまつりて

題しらす

物名

十月十五日の夜たはふれにつくること葉  
春曉雁といふことをよめること葉

初うまいなりまうてのこと葉

夕すゝミのこと葉

こゝろやりのひとりこと

★五百子との往来文

節花君へ若葉をおくるふミ

おなしくかへしのふミ

二月末六日五百子君におくるふミ

五百子君より初秋におくり給はりし文のかへし

九月のふミ

十月のふミ

雪の日五百子君よりおくり給はりし文のかへし

五百子君よりおくり給はりし文のかへし

五百子君におくるふミ

★佐久間君におくるふミ

★五百子の跋

★鷹信の跋

三、「信濃のみちの紀」

柴桂子氏は身分を問わず、さまざま近世女性たちの書き

残した作品を集め、研究している。論文「旅日記から見た近世女性の一考察」(『江戸時代の女性たち』吉川弘文館)によると、旅日記は一三三編にも及ぶ。その中の六六編は、神社仏閣参詣および物見遊山の旅で、それらをさらに分類すると神社仏閣参詣は三九編である。圧倒的に多いのは伊勢詣での一五編、次に近郊の神社参詣。そして善光寺詣でと続く。「信濃のみちの紀」はその中の一編である。

「信濃のみちの紀」は本人が旅日記のように書き記したものである。日付が文の途中に入っていることもあり、同じ日付が二度書かれていたりする。複写本のためよくわからないが、日付については後筆かもしれない。

この旅日記は節花尼が母と共に善光寺詣でをした時の紀行文である。母のかねてからの願いであったので、一緒に詣でて欲しいとの言葉に、一大決心をしたのであろう。一ヶ月以上はかかる長い旅路を思いやられてか、自作の歌はなく古今集三八七

源実が筑紫へ湯治に赴いた時に山崎で別れを惜しんだと

ころで詠む白女

命だに 心になかなふ ものならば

何か別れの 悲しからまし

と古歌で心情を顕わし卯月朔日に母と従者として出発する。

京の粟田口より三井寺、石山寺に詣で中山道を往く。多賀大社に詣で、赤坂より谷汲寺に迂回し又中山道に入る。

中津川馬竈妻竈から飯田に入る。小野を通り塩尻あたりから善光寺道にはいり、刈谷ヶ原を通り四月一九日に善光寺に詣でる。出発の日から一九日目のことである。

ぬかすけハ 身にしむはかり かしこくて

なミタのほかは ことの葉もなし

「ひと日ふた日この御寺にさもらいて夜もすがら御名となふる尊さハこの世に似るものなし。ふとおよびもてかぞふれば十はたといふもあまりぬめり」と節花尼は書き記している。再び詣でることは難しいであろうと、かえりみがちに出發する。そして「二五日に麻積にやどる」と、あるので善光寺に滞在したのは六日程と思われる。

帰路は往きと同じ善光寺道を通り中津川へ着き同じ宿に泊まる。この間、塩尻から伊奈路を通ったのか、中山道を通ったのかは不明である。中山道は鳥居峠あり、福島の間所ありで、伊奈路を選んだかもしれない。中津川から大井を通り追分から釜戸、内津から名古屋に入り「さや」から舟で桑名まで海上三里、四日市を過ぎ伊勢参宮道の松阪、山田、外宮、内

宮と参詣する。帰路は参宮道から津、坂の下に宿る、とある  
ので伊勢別街道を通ったものと思われる

鈴鹿峠を越え、矢橋から舟にて打出の浜に渡り、四〇日か  
けた旅も無事終り「浄土の君うからやから母君の御迎へ  
に出てませしにうれしさいはんかたなし」と無事の帰着を喜  
び

もしほくさ かきつめてしも かひなしや

また浦なれぬ 海人のしわざに

という歌で終っている。

「一生に一度は伊勢詣で」というのが日本人の願いであった  
というが、そういう思想が定着したのは近世はじめからとい  
われている。それには御師の活躍があり、それらは講を作っ  
ての旅、参詣が主であったが、著者のように二三人または数  
人での旅も、ずっと多かったと思われる。

節花尼は三〇代後半か四〇代そこそこかと思うが、母君と  
従者との四〇日の旅路はいかばかりであったかとおもいめぐ  
らす。季節は四月五月と旅には一番よい季節、花を愛で景色  
に感動し、また以前京で行き会った人との思いがけない再会  
を喜んだり、或いは従者とはぐれてしまつて心細い思いをし  
たりと旅でなければ味わえないことなど、自分の目で見心で

## 近世女人文人風土記 (六)

### 出羽の巻 (秋田県)

柴 桂 子

俳諧

秋田の傑出した女流俳人は三輪翠羽(一七六七―一八四六)  
である。名をひささといひ、一四歳で父に死別したため父の弟  
て俳人の小夜庵五明に養われ、茶道や礼法など女としての教  
養のほか俳諧や国文全般の教育を受けた。初め土崎の加賀谷  
紫石に嫁き、後、能代の三輪良弼と再婚した。紫石との間に  
一子をもつけたが幼くして喪った。「子の一周忌に」と題した  
句がある。

秋の花物あちきなし秋のくれ

叔父五明の三三回忌に『小夜しぐれ』一卷を編んで手向け  
とした。

しぐれには今も昔もなかりけり

感じたことを文に綴り、歌に詠じた一人の女性との出会いに  
より、江戸時代の女性の姿を垣間見ることができた。『枕臂  
集』の全文を解読したら、節花尼という人柄が浮かび上がっ  
てくるかと思う。跋文の鷹信、五百子についてもまだ研究の  
余地が残されていると思う。

この文を書くにあたり、会員の皆さんに助言をいただいた。

#### 【参考文献】

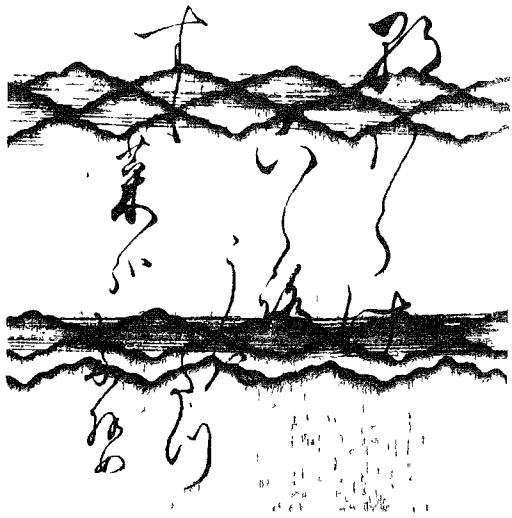
- (1) 『女性人名辞典』(日本図書センター)
- (2) 岸井良衛著『五街道細見』(青蛙房)
- (3) 柴 桂子著「旅日記から見た近世女性の一考察」  
『江戸時代の女性たち』(吉川弘文館) 所収
- (4) 今野信雄著『江戸の旅』(岩波新書)
- (5) 稲垣史生監修『日本の街道』(三省堂)
- (6) 児玉幸多著『宿場と街道』(東京美術)
- (7) 『大日本道中大絵図』(童心舎)

〔住所〕〒175 板橋区赤塚三二二八三

朝ほらけころうきたつすゞ菜哉

晩年に近くを旅して「道の記」(八森紀行)「旅の記」(七倉  
紀行)をつつっている。翠羽の句集には『春の袖垣』がある  
が、安藤和風氏によって「翠羽句集」としてまとめられ、そ  
こには四一三句の作品が収められている。

地域の子女の教育にも当たり、人々から「秋田の千代女」  
「権少納言」「三輪のお婆さん」ともてはやされたが、八〇年  
の生涯はどこかさびしさを感ぜさせられる。



翠羽筆 (伊澤慶治氏蔵)